

噫小泉成一君 五十風 正

去る明治三十四年の春布施淡君が文部省の検定試験に合格して歸仙するや、問もなく騰チブスに胃され、突然永眠され

君は明治二年八月十六日を以て、九州大分縣福山町に於て呱呱の聲を擧げられたのであるが、幼にして両親に従ひ鎌倉方面に移られたさうである。天稟畫才あり、十四歳にして東京彰技堂に入學故小山正太郎氏等に就き畫學を修め、十九歳にして同校を卒業す。此間英語及佛法學校に入りて語學を研究す。二十歳にして東京高等商業學校豫備門の畫學教授を擔當し、尋で神奈川縣尋常師範學校に移り

に對しては随分嚴格であつたが、好んで其世話をなされた。特に自己の子供達に對しては子煩悩と云ふ方であつたと云ふことである。幾何畫は最も得意とするところであつて、大いに生徒の信望を博して居られた。若い時分は随分大酒もされたが、數年前から健康の爲め殆んど禁酒の姿であつた。

夫人おくの子は鎌倉の人、四男一女あり、長男於菟彌氏は陸軍工兵少尉として盛岡聯隊に勤務中。三男守三氏は今春本院中學部を卒業された。

君近來比りに精神界の事柄に憧憬し、其信仰大に進み、十月廿五日の午後院長夫人を訪問して所信を開陳し近々受洗すべきを約し、歡喜に充ちて同所を辭し歸途突然腦溢血に胃され、越えて廿七日の朝終に醒めぬ眼に就かれたのである。享年五十三歳廿餘年間同僚として公私の交を恭うしたる僕に執つては君の長大なるの偉は何時迄も忘れる事は出来ない。

東京支部の近況

早坂 二郎

▲東京支部は此頃會員將に二百名に垂んとし一寸會をやるにも片手間に招待状を出す手輕な事も出来ぬ程の盛況になつた。此四月から母校の須藤先生が東京に移られたので母校と支部との連鎖は精神的にも實際上にも非常に密接の度を加へて來たことは大いに慶賀すべきである。

支部長には平山氏、委員には若手の二團組(紳士からは會費倍額をとりまします)も學生が六七人、みんな喜んで有能に事務に當つてゐます。▲東京は理窟ばかり云つて居るとはプロパガンダな批評ですが、母校の事でもただ目先の小細工ばかりやつては駄目です。原さんも「理想が無ため」やられました。東京は母校と遠く離れて居るため、實狀がよく解らない、自分達の卒業當時の現狀を論據として居る憾はありませうが、そ

れだけ理想論が起り易いのです。學院の燒失の際にも應念の策は勿論ですが、學院將來の敷地について、將來の組織に就いて、またその根本精神に就いて決議文を送つて衷心を披瀝したのは東京支部でした。▲最近さげば母校も事實上の財團法人になると云ふし、恩給制度も整つたさか。之はいづれも我々の決議の一項たつたのです。我々は母校の將來の爲めに大いに之を祝する次第です。

▲日本では學校の封建的發達(私塾)及官僚的發達(官營)の沿革に累せられて、本來自由なるべき學府が主宰者その人のものであると云ふ様な氣分が濃厚にありまあり、生徒のものであり、同窓生のものであり、更に廣く社會文化のものであると云ふ義しい紀風が漲つてゐます。多少その精神のエクスプレッションに過不及はあつても、此精神が學院の基調であることは疑を容れない。此事は學院の爲に祝すべきことであり、今後も大に擴充せられんことを願ふ所です。

▲同窓も母校の爲を思ふこと切なるものがあります。遠隔の境にあつては之を刺戟してくれるものを熱望します。つまり學院時報などの天職がもつと理想的に達せられる事を望むのです。離れたもの間に温い詳らかな報道を齎すものがあるとしたら、その間の友情が飛躍的な進展を見せることは疑なからうと思ひます。各地の會の様子などもいゝ事ですが、出席者の名前ばかり羅列したのでは効果が薄い。その底を流れて居る氣持でも知らせて呉れたらもつといふと思ひます。時報を社會記事の雜報欄にはしたくありません。

▲今年去る十月十七日、津田、佐藤、加藤の三先生に引率された七十名の旅行團を本郷の帝大青年會で迎へました七十といふ多數は今年が始めてであります。席上主人側から平山氏の怪氣煽、須藤氏の教訓談、小平氏の感激論、小松氏の歡迎の辭筆者の唯物的唯論論など談論風發で長途の旅行にくだびれた諸君に重い葛籠を背負はせた形になつたが、賓客側も津田氏の御挨拶や生徒代表の御愛嬌ある奇想天外式の挨拶あり十時過ぎまで歡談湧くが如くであつた。此機に臨んで旅行團の學生諸君に不用意を謝し、將來の御發展を祈つておく。因に當夜の出席者は主人側三十名、數に於ては全然壓倒されて居たことは残念だ。

▲院長部長歡迎會臨時總會。十一月十二日午後七時 於神田一橋學士會館 六かしい(と思はれて來た)須藤先生が自發的の大車輪で案内状を書かれたせいか知れぬ、が久しぶりの院長部長お揃ひの上京とあつて、同窓會の面々も大分珍しい顔觸が揃つた。あちらこちらで仙臺東京の連鎖が新しく繰返されてゐる中に八時近くになつてやつと平山部長の運參、お蔭でフォーマルな會はキビキビと而も、之は實際だが、學院としては今までに見たことのない、尚に衣着せぬ會が進行した。先づ出村部長の一般的な學院の報告があり、次いで院長のお話があつた。學院の近況及びまだ親しくお伺ひする機會が無かつた大抱負に就いて御説明があり、一同非常に愉快を禁じ得なかつた。

▲之からが當夜の特色たる希望や注文の出し合となつた。先づ橋本(恒之)氏が立つて社會に立つた卒業生の養成利用を高唱、僕は兼て學院の改革を考へて居たので此機を利用して學院スピリットの根本を闡明し、教育の

本報に反響する所から、自發的の機關によつて久間君は早大の例を説いて如何に宣傳の必要なるかを、理論實際の兩方面より學生大會の必要を説いた。須藤氏は事分と教育との分離を望んで能率進歩を計らんと述べ、小松君は教員組合の設立論から教育の國際化國際心の養成を高調し、小平氏は實際的實際の根據を説かれた。當日の會は實際的會として白眉のものたる計りなく、時代の底に流れる或ものがよくくく、之の餘先を現した充實した會であつた。

▲規則改正一件 支部規則第八條、會費を設定して年額一個徴收の事に決定之も支部發達の直接の反映である。▲最後に木村久一君が最近假出獄されたことを御知らせ致します。同君は昨年五月研究上の事から罰を買ひ、不敬罪の罪名を得、本年春入獄されましたが、固より事實はそんな罪ではなく現行法制上罪に陥られたと云ふのが本當で、一年の刑期が半分足らずで借出獄の恩典に浴したのも故ありと云ふべしです。氏の爲に健康を祝します。

▲次で部長から建築寄附の勧誘があつたが此種の寄附は勧誘されるまでもない筈のものであるが、事實面にはインフレーションの不充分、計劃の不明手続に對する感情上のチグハグなどから未だに寄附の運びに至らぬものが多いと云ふことだ。現に自分もその一人、羽尾君などもその一人で、當夜釋然として寄附を申込んだ人が五六人あつたのを見て、此邊の消息が解ると思ふ。

- ▲當日の出席者 羽尾保 愛澤五郎 吉村彪三 西條辨司 小平國雄 曾我部環 早坂三郎 石川義一 芳賀敬一 吉川篤敬 千葉勇 吉村清 和泉幸一郎 伊藤靖 鷲島剛三 西淵巖 五十嵐碩 小松武治 木村久一 菊地武雄 最上勇 山崎吉之助 八城伍芳介 赤澤市藏 原正男 橋本恒之 本坂二郎 以上三十名 須藤鬼一 佐久間六 但し愛校の精神に燃えて居る人はこればかりでなし。終りに院長部長をはじめ學院すべての方々の御健康と御發展を祈ります。